

# 若松港の軍艦防波堤についての一論考

— 敗戦後残存の日本帝国海軍艦船の報国 —

正会員 新開 明 二\*      正会員 碓 崎 貞 雄\*\*  
 正会員 小 松 武 邦\*\*      正会員 三 好 章 夫\*\*  
 正会員 森      俊 哲\*\*      正会員 高 木 祐 介\*\*\*

A Study About the Warship Breakwater of the Wakamatsu Port  
 — the Patriotism of the Japanese Empire Navy War Vessel Relic After Defeat —

by Akiji Shinkai, *Member*      Sadao Kakizaki, *Member*  
 Takekuni Komatsu, *Member*      Akio Miyoshi, *Member*  
 Toshiaki Mori, *Member*      Yusuke Takaki, *Member*

**Key Words:** Breakwater, Japanese empire navy war vessel, Patriotism, Port, Residual war vessel

## 1. 緒 言

日本の敗戦後、連合軍の占領政策の一環として、疲弊した日本の港湾等の整備・増設等が計画され、計画実現化の一つとして、残存する日本帝国海軍艦艇<sup>1) 2)</sup>を防波堤として利用することが考えられた。その利用実現例の一つとして、洞海湾入口北九州若松港の「軍艦防波堤」と呼称されて北九州市民に親しまれている防波堤が存在する<sup>3) 4) 5)</sup>。

本報では、「軍艦防波堤」の成立の経緯・変遷・現状等を調査し、技術関連遺産としての評価と文化的遺産としての意義について考究することを目的とする。当初の基本の防波堤は3隻の駆逐艦で構成されており、戦後日本の復興と平和繁栄の礎のために艦艇3隻本体そのものが貴重な資財として利用された実現例であり、現在も港を守り貢献を続けている。

## 2. 敗戦後の日本帝国海軍残存艦艇の状況とその処分

日本帝国海軍は、世界有数の保有量を誇っていた艦艇を戦争の終結によってその多数を失った。敗戦後の残存艦艇の状況とその処分の概要について、文献<sup>1)</sup>を参照して説明する。

### 2.1 残存艦艇の状況

敗戦における我が国の艦艇の状況は、太平洋戦争における艦艇隻数の増減により把握できる。1945年8月18日時点における艦政本部の調査によれば、開戦時399隻、開戦後増加827隻、敗戦調査時点535隻であった（この残存艦艇の隻数は在籍艦を示したもので、除籍処分未済のものを含む）。文献<sup>1)</sup>でも強調されているが、行動可能な駆逐艦以下の艦艇は意外に多く、修理可能な損傷艦等を数にいれるならば、いまだかなりの海軍力を有していたことが分かる。

### 2.2 残存艦艇の処分

すべての艦船は連合軍に押収され、連合軍の承認・指令のもとに、終戦業務（引揚輸送、掃海等）に従事遂行、着

底・故障のため放置されていた艦船の引揚解体等、残存艦艇の処分が実施された。

残存艦艇の処分状況は、連合軍へ引渡し135隻、解体197隻、掃海に従事30隻、民間で使用90隻、防波堤に利用15隻、連合軍が海没処分37隻等が挙げられる<sup>1)</sup>。

### (1) 残存艦艇の賠償引渡し

1946年以降、引揚輸送を終えた「特別輸送艦」、機雷掃海を終えた掃海艦等が旧軍港内に繋留され、「特別保管艦」と称された。その内約150隻が、アメリカ合衆国、英国、中華民国およびソ連の4カ国へ賠償として配分引渡しが予定された。引渡しに際し、兵装を撤去し、船体、機関、艀装等の整備・保安に努力が払われた。

配分艦艇は、中華民国とソ連では多くの艦が使用されたと言われている。英国では一部利用された艦があるが、程なく大部分が解体された。アメリカ合衆国では、一部雑用・実験として保存後解体されたが、大部分を日本で売却後・解体し、あるものは我が国に返還された<sup>1)</sup>。

### (2) 国内処分・解体

アメリカ合衆国等4カ国へ配分領収された艦艇、連合軍の許可のもと民間へ払い下げて再利用された艦艇等を除き、他のすべての艦艇は解体され、戦艦「伊勢」、「日向」、「榛名」、航空母艦「天城」、「龍鳳」等をはじめとしてその量は膨大である。1948年までの時点で解撤艦艇は、隻数227、排水量738,553トン、発生材料233,071トンであったという<sup>1)</sup>。

### (3) 復員輸送と掃海に従事

敗戦後の喫緊の問題は、外地に残留する軍人軍属の引揚、中国大陸等各地の数百万日本人の帰国、太平洋上諸島に孤立の軍人軍属の引揚であった。

本来、人の輸送は商船隊の仕事であるが、商船隊の船腹の喪失も莫大であり、残存船には戦時急増戦標船が多く含まれておること、造船所の稼働能力の低下による修理困難等があった。海上輸送はほぼ途絶の状況であった。米軍より、Liberty型船、LSTを各100隻が、引揚用に貸与されたが、残存艦艇も「特別輸送艦」と称され、引揚輸送に従事し、その数は約150隻にのぼる。

「特別輸送艦」は、航空母艦2隻、巡洋艦3隻、潜水母艦1隻、敷設艦1隻、駆逐艦28隻、海防艦61隻等である。駆逐艦には、本報告の主題である「軍艦防波堤」の構成要素の一隻である「冬月」が「特務輸送艦（工作

\* 九州大学（名誉教授）

\*\* 西部支部 ふね遺産調査検討委員会

\*\*\* 三菱重工海洋鉄工（株）品質保証部

原稿受付 平成30年3月23日

春季講演会において講演 平成30年5月21, 22日

©日本船舶海洋工学会

艦)」として含まれている<sup>1)</sup>。

次に、日本の港湾・沿岸に投下された機雷は、敗戦後の海上輸送を困難にらしめ、早急の機雷掃海が課題となった。米国海軍掃海隊は進駐後日本近海の掃海を行ったが、我が国も、連合軍の指令下使用可能な艦艇を利用して掃海作業に従事した。掃海用艦船は、海防艦 21 隻、掃海艇 2 隻、哨戒特務艇 15 隻、駆潜特務艇 70 隻等であった。我が国が敷設した約 55,000 余個の機雷については 1946 年 7 月までにはほぼ掃海を完了した<sup>1)</sup>。

なお、掃海作業にあたり、敗戦後に、危険作業に挺身された海軍軍人の触雷・沈没による尊い犠牲があったことを銘記しなければならない。

#### (4) 残存艦艇の港湾施設への利用

駆逐艦以下の小艦ではその船体を、港湾・漁港等の防波堤として利用された例がある。

敗戦後の全国的な資材不足から残存艦艇の港湾施設への利用が緊急の課題となった。その当時の雰囲気は次に示す第 002 回国会本会議の質疑記録より感じ取ることができる。

第 002 回国会本会議第 71 号昭和 23 年 6 月 26 日 (土)

○議長 (松岡駒吉君) 連合軍から防波堤用としてもらい受けた軍艦の埋設作業に関する緊急質問を許可いたします。菊池義郎君。

○菊池義郎君 …… 連合軍からして、防波堤として沈めるようにと日本に与えられました艦艇、すなわち …… この解体を命ぜられた軍艦の中から二十二隻もらうことができたのであります。すなわち防波堤として港をつくつてよしいという許可が得られたのであります。これまた非常なる好意であります。その許可を受けました軍艦の名前を申しますと、碓、澤風、柎、竹、汐風、桂、鈴月、柳、夕月、美竹、おす、矢竹、春風、蓮、椿、潮、矢風、檜、第一迫浦、室津、海防艦九十五号、同五十七号等であります。沈める場所は、秋田縣に三隻、福島縣の小名浜に四隻、四國の高松に四隻、山口の宇部に三隻、八丈島に ……

文献<sup>1)</sup>では、『沢風および桂 (福島県小名浜)、冬月、涼月および旧柳 (若松)、春風 (京都府竹野)、蓮 (福井県四箇浦)、汐風 (宮城県女川)、柎、旧竹および伊唐 (秋田)、矢竹 (八丈島神湊)、海 57 (宇部) の如く、船底に砂利等をつめ船体をコンクリートで固定したまま防波堤として、湊の守りについている』と説明されている。しかし、駆逐艦「桂」、「蓮」の防波堤は存在せず、計画はあったが実際に沈設されなかったと推察される<sup>3)</sup>。また、文献<sup>1)</sup>で挙げられていないが、広島県安浦港に、コンクリート製の特設運送船「第一武智丸」、「第二武智丸」が防波堤として利用されて、船形を視認できる。

本報告の主題である「軍艦防波堤」の構成要素の駆逐艦「冬月」と「涼月」の 2 隻は、現在港岸に埋没状態にあるが、「柳」は上甲板より下をコンクリート防波堤に埋没し、上甲板の位置の形状を視認できる。

### 3. 若松港の「軍艦防波堤」

残存日本帝国海軍艦艇の防波堤への利用実現例である、洞海湾入口北九州若松港の「軍艦防波堤」について、文

献<sup>3) 4) 5)</sup>を参照し、その建設、変遷、現状を概説する。

#### 3.1 「軍艦防波堤」の建設

北九州若松港の防波堤として用いられた駆逐艦 3 隻は、「柳」(船長 88.39m, 基準排水量 755 t), 「涼月」(船長 134.2m, 基準排水量 2,701t), 「冬月」(船長 134.2m, 基準排水量 2,701t) である。

佐世保にて上甲板より上の構造物を撤去され、1948 年 7 月に若松港船溜りに曳航、若松港入港路西側には元々沖に向かって伸びていた浅い砂州上に 3 隻が陸側から「柳-涼月-冬月」の順で一列に沈設された。「柳」と「涼月」は艦首を沖に向け、「冬月」の艦尾が沖側の最先端となる位置関係にある。3 隻直列約 400 メートルを中核として、約 770 メートルの防波堤が建設された。

Fig. 1 に「軍艦防波堤」の全体配置の略図を示す。図は、現在の状況であり、建設当時に較べて、北側(響灘側; 図の斜め左約 45° 下方向)に大規模・広域の埋立護岸が建設され、駆逐艦「冬月」と「涼月」の 2 隻は、埋没状態の配置が示されている。なお、洞海湾より関門港への湾口方向は、図の左方向である。

Photo 1 には「軍艦防波堤」の建設風景が示されている<sup>5)</sup>。

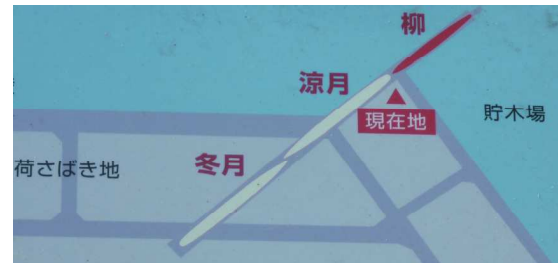


Fig. 1 The sketch of total placement of the warship breakwater (GUNKAN-BOUHATEI)

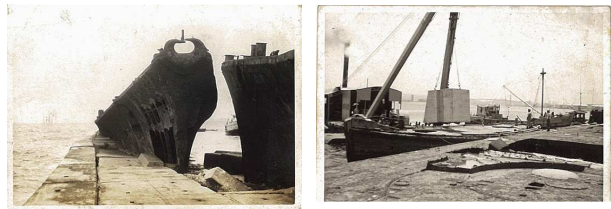


Photo 1 The construction scenery of the warship breakwater (GUNKAN-BOUHATEI) [cited from Ref. 5)]

#### 3.2 「軍艦防波堤」の変遷と現状

「軍艦防波堤」は、響灘側の大規模・広域埋め立てによる環境の変化に加えて、建設時より次のような変遷を経て現在に到っている<sup>3) 4) 5)</sup>。

1962 年の台風災害復旧工事の際に、駆逐艦「冬月」、「涼月」両艦の船体はコンクリートによって完全に被覆された。駆逐艦「柳」のコンクリートの被覆・充填範囲も拡大した。その状況を Photo 2 および 3 に示す。



Photo 2 Whole view of destroyer (YANAGI) constituting a warship breakwater (GUNKAN-BOUHATEI) [cited from Ref. 3]



Photo 3 The top surface of destroyer (YANAGI) is photographed to the bow direction (corrosion / damaged) [cited from Ref. 3]

2000年には、駆逐艦「柳」について、コンクリートが流し込まれた区画の仕切り鋼板が腐蝕し、コンクリートのブロック間に隙間が生じた。修復がなされ、コンクリート被覆・充填範囲も拡大された。その状況を Photo 4 および 5 に示す。



Photo 4 The top surface of destroyer (YANAGI) is photographed to the bow direction (repaired)



Photo 5 The side structure of destroyer (YANAGI) is photographed from the diagonal upper part (repaired)

### 3.3 「軍艦防波堤」の課題

「軍艦防波堤」の沈設当時の状況を考えれば、外海（響灘）より大波が進入し、防波堤は消波に大きく貢献していたことが想像できる。その分、損傷も急速に進んだものと思われる。現在、埋め立てにより、大波の進入は少なくなったが、ある季節における特殊な気象状態の際に、東北東に開けた洞海湾口よりの大波の進入があり、「軍艦防波堤」に損傷を与える可能性は存在する。防波堤の越波阻止のためと思われる、コンクリート立方体ブロックが6個ほど「柳」上に設置されている。



Photo 6 Corrosion / deterioration of the exposure steel materials part of destroyer (YANAGI)

また、Photo 6 に示すように、露出鋼板部の腐食・劣化はさらに進んでいる。何らかの対策が必要であり、「軍艦防波堤」の管理整備にあたっている、北九州市港湾局、北九州市“時と風”の博物館へ多くの期待が寄せられる。

## 4. 歴史的・文化的意義

「軍艦防波堤」について、歴史的・文化的側面からその意義を考究してみる。防波堤自体の評価は、土木学会より近代土木遺産 2,800 選にも選出されていることから見て、技術的遺産として定まっておき、歴史的・文化的側面より意義あるものと認められる。造船学の立場から評価・意義を調査するには、「軍艦防波堤」の構成要素である3隻の駆逐艦の個々についても評価を行う必要がある。本節では、構成要素の個々の意義について述べる。

### 4.1 構成要素の歴史的概要<sup>6)</sup>

「柳」は、「桃型駆逐艦」で、1915年に佐世保海軍工廠で建造された。Fig. 2 に概略一般配置図を示す。

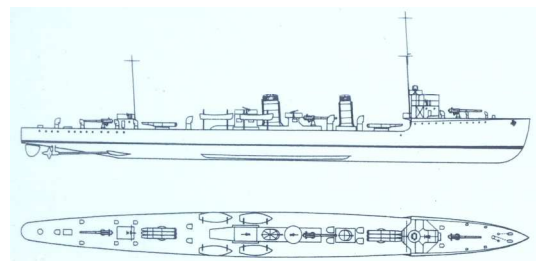


Fig. 2 The rough arrangement of destroyer (YANAGI)

船首楼の乾舷は高くフレアを増し、船首楼を長くして艦橋も後方に置くことで凌波性の向上が図られた。また、兵装は魚雷発射管に3連装発射管を初めて装備、2基6門を搭載し当時の同じ規模の駆逐艦の中で強力であった。1940年に除籍され、太平洋戦争中は佐世保にて係留されて、主に旧制中学の軍事教練などに使用されていた。

駆逐艦「冬月」、 「涼月」の両艦は「秋月型駆逐艦」であり、機動部隊に付随する防空・対潜任務専用の直衛艦として計画された。最終的に雷装も付加されたが、長大な航続力、新型の10cm連装高角砲4基搭載、極めて高い評価が与えられた。

「冬月」は、舞鶴海軍工廠で1944年に竣工した。「秋月型駆逐艦」に類別されたが、船体各部形状の簡略化・艦橋の大型化などの変更が加えられた。1948年に旧佐世保海軍工廠の佐世保船舶工業で上甲板より上の構造物を撤去解体後、残りの船体は防波堤として利用された。Fig. 3に概略一般配置図を示す。

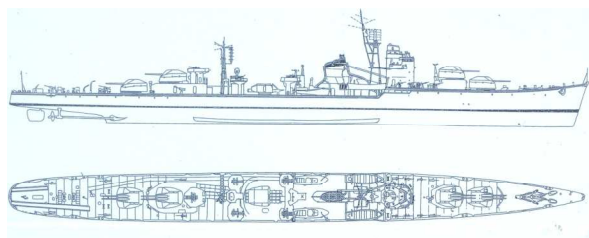


Fig. 3 The rough arrangement of destroyer (FUYUZUKI)

「涼月」は、「秋月型駆逐艦」の3番艦として1942年三菱長崎造船所にて竣工した。「沖縄海上特攻」より奇跡の生還後、佐世保の相の浦に防空砲台として係留された。1948年に、旧佐世保海軍工廠の佐世保船舶工業で上甲板より上の構造物を撤去解体後、残りの船体は防波堤として利用された。Fig. 4に概略一般配置図を示す。

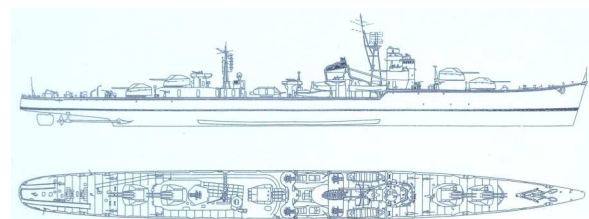


Fig. 4 The rough arrangement of destroyer (SUZUTSUKI)

#### 4.2 構成要素の意義と報国

「軍艦防波堤」の構成要素について、その意義の理解を深めるために、3隻の駆逐艦の戦歴・戦功についての説明が必要である。

若松の「軍艦防波堤」については、記憶を語り継ぐことを目的としたグループが存在し、関連の文献資料が多数

収集されてホームページによりその活動を閲覧・参照することができる<sup>3)4)</sup>。本節では、日本帝国海軍艦艇図面集<sup>2)</sup>を基礎資料として、文献<sup>7)6), 3)~5)</sup>を参照し、3隻の駆逐艦の戦歴・戦功の概略を述べる。

駆逐艦「柳」は、二等駆逐艦としては初めてタービン推進を採用した「桃型駆逐艦」の一隻である。一等駆逐艦に勝るとも劣らない強力な兵装を備えた画期的な艦で、第一次世界大戦では第二特務艦隊（欧州遠征艦隊）に属し、地中海でドイツ潜水艦部隊と死闘を演じ、英国船団護衛として大いに活躍した武勲艦である。1940年除籍後も青少年の教育育成に貢献した。

駆逐艦「冬月」、 「涼月」の両艦は1945年4月“沖縄海上特攻”の戦艦大和の護衛艦として出撃し、生還を果たしている。

「冬月」は、敵のロケット弾2発を受けるなどの被害を受けながら、戦闘を継続し、作戦中止命令の受領後は、艦隊の生存者救助活動にあたった。森下信衛第二艦隊参謀長、吉田満少尉以下「大和」生存者約100名を救助した。巡洋艦「矢矧」、駆逐艦「霞」の乗組員と併せて約600名以上を救助し、佐世保に帰還した(戦死者12名)。

「冬月」は佐世保海軍工廠で修理後、関門海峡と対馬海峡方面の哨戒に服務し、1946年「特別輸送艦」に指定されたが、復員輸送に従事せず工作設備を搭載して工作艦となり、掃海部隊の支援任務に就いた。任務終了後佐世保へ回航された。艦影をPhoto 7に示す。



Photo 7 Navigation warship (Destroyer FUYUZUKI) [cited from Ref. 3)]

「涼月」は、戦闘中2番砲塔付近に爆弾1発、至近弾3発を受けた。戦闘続行不能と判断した艦長は、「大和」沈没後単艦で帰投を開始した。被弾により艦首が沈下(前方傾斜10度)、中央部も海面から甲板までの余裕がない状態で前進不可能であり、後進にて、羅針儀、通信装置等亡失のもと、佐世保に帰着した(戦死者92名)。「涼月」は佐世保海軍工廠で修理の後、作戦に参加することなく、佐世保の相の浦に防空砲台として係留されたまま敗戦を迎えた。

「軍艦防波堤」の構成要素である3隻の駆逐艦(「柳」、「冬月」、「涼月」)の戦歴・戦功を列記するだけで、各艦がその役割・責務を十二分に果たしたことが了解できる。敗戦後も、若松地区港湾の守りの重責を担い、日本の復興・繁栄・平和の実現に寄与してきたことは自明であり、構成要素の意義は「軍艦防波堤」の評価をより高めるものと思料される。

調査を進める上であらためて、戦争で倒れられた多くの英霊の御遺徳の基に、現在の平和な日本があるのだと

言うことを痛切に感ずる。“軍艦防波堤三艦慰霊碑”が若松の高塔山中腹に建立され、慰霊祭等がとり行われている。御霊のご冥福をお祈りし追悼の言葉を記したいと思いますが、うまく表現できませんので、まことに恐れ多いのですが、明治天皇が、日清戦争のおり兵士の『たま』をしのばせ給う大御心をうたはれた大御歌を拝誦させて頂くことにします<sup>8)</sup>。

#### 明治天皇の御歌

国の爲いのちをすてしものふの魂や鏡に  
いもうつるらむ

### 5. 結 言

「軍艦防波堤」の成立の経緯・変遷・現状等を調査し、技術関連遺産としての評価と文化的遺産としての意義について考究した。

2015年に「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録された資産の一つ「八幡製鐵所関連施設」の港湾が洞海湾にあり、軍艦防波堤が設置された場所は、響灘方面埋め立て以前の敗戦直後、現在では想像できないほどの重要な意義があった。防波堤自体は、土木学会より近代土木遺産2,800選にも選出されているが、日本船舶海洋工学会のふね遺産の認定対象にも相応しいものと思料する。

論文作成にあたり、図表等を引用・参照させて頂いた参考文献の著者の方々に心より御礼申し上げます。特に、故福井静夫氏の著書より敗戦後の日本帝国海軍の残存艦艇、駆逐艦等について多くのご教示・参照させて頂いたことを記して、深く感謝申し上げます。

### 参 考 文 献

- 1) 福井静夫：終戦と帝国艦艇 わが海軍の終焉と艦艇の帰趨，(株)光人社，2011。
- 2) (社)日本造船学会(編)：日本海軍艦艇図面集，(株)原書房，1975。
- 3) 松尾敏史：『若松軍艦防波堤物語 ～戦いの記憶を語り継ぐ～』(公)福岡県人権研究所，2013。
- 4) 澤 章：軍艦防波堤へ 駆逐艦涼月と僕の昭和二〇年四月，(株)栄光出版社，2011。
- 5) 上農達生：防波堤となった「涼月」と「冬月」，軍艦防波堤 若松 歴史群像，Part 4。
- 6) 福井静夫：日本駆逐艦物語，福井静夫著作集 一軍艦七十五年回想録，第5巻，(株)光人社，1993。
- 7) 阿倍三郎：特攻大和艦隊 帝国海軍の栄光をかけた10隻の明暗，(株)光人社 NF 文庫，N-874，(社)潮書房光人社，2015。
- 8) 三井甲之：明治天皇御集研究，国文研叢書 No.18，(社)国民文化研究会，1977。